

「老人性うつ」とは？

結婚してもうすぐ 60 年になろうという老夫婦。長女は結婚して車で 20 分ほどの距離のところ、共働きしながら小学生と保育園児の育児で大忙し。長男家族は老夫婦との二世帯住宅の 2 階に住んでいますが、長男の妻も忙しく仕事をしており、孫も中学生になって、老夫婦の元には寄り付かなくなりました。



老夫婦の妻は、ご近所に会えば立ち話をする友人がたくさんおり、掃除・洗濯・三度の食事作りと、80 歳になった今も、毎日張りのある生活を送っていました。

一方の老夫婦の夫は、地元で小さな土建業を堅実に営んできましたが、75 歳を過ぎた時に会社を畳んで引退しました。社交的な妻とは対照的に、口数も少なく寡黙なタイプで携帯電話すら持っていない夫は、仕事を辞めた後は、庭の植木の手入れ以外に趣味もなく、ほとんど自宅の一室に引きこもって過ごしていました。

ある日、夫の運転で自宅から少し離れた大型ショッピングセンターに夫婦で買い出しに行った帰りの駐車場でのこと。夫が妻に対して「ひとりで運転して帰ってくれないか。久しぶりに電車に乗ってブラブラしてみたい。もう 10 年以上電車に乗っていないから」と切り出したそうです。妻は不自然さを感じたものの、普段は家に閉じこもっている夫が活動的になるのであれば、それを止めたならまた家から出なくなってしまうかもしれないと思い「行ってらっしゃい」と送り出したそうです。

それから、夫は帰ってきませんでした。警察に連絡はしましたが、夫は 1 か月たった今も行方不明で消息を絶ったままです。妻は、ショッピングセンターで夫を止めなかったことを後悔し、自分を責め続けています。

この夫は、妻も二世帯住宅の上の階に住む長男家族も気づいていませんでしたが、「老人性うつ」だったのではないのでしょうか。

どんな世代にでもうつは起こりますが、初老期から老年期に掛けて「うつ病になりやすい因子」が増える時期と言われています。その原因の一つと言われるのが喪失体験で、仕事を定年退職したり、自分と同じ年代の人が亡くなったり、自身が大きな病気になったりすることで、こうしたことがうつ病の引き金になるそうです。

老人性うつ病の特徴は、多くの場合その主症状が、生きがいや興味の消失、漠然とした不安感であること。もともと自宅でも口数が少なかった夫は、うつ症状が進んでいても、その SOS サインを家族にすら出す術を持ち合わせていなかったのでしょう。

また、軽度の認知症との区別がつきにくい場合も多くあります。認知症なのか、老人性うつなのか、いずれにしても早期発見してそれぞれの対処療法を講じるべきです。

認知症等（老人性うつによるケースを含む）による高齢者の行方不明者は、2020 年時点で 17,656 人に達し、うち 527 人が死亡しているそうです。この件の夫が無事に発見されることを願っています。